

東北地方の木摺臼の全域調査

——身体技法から日本列島の民族的多様性を検出する試み——

河野 通明

KONO Michiaki

I 非文字資料としての民具の重要性

1 民具に内包された庶民レベルの歴史情報

神奈川大学の COE プログラムは「人類文化研究のための非文字資料の体系化」をテーマに掲げている。これまで人類の文化の研究、とりわけ一民族内での研究は歴史では文字資料、民俗学研究では聞き取りを中心におこなわれてきたが、人々が生きてきた軌跡は非文字の資料とりわけ「民具」と総称される伝統的な道具・生活用具の形態や呼称のなかに痕跡として残っている。民具の形態は機能・用途に関する情報とともに中国系・朝鮮系といった系譜情報も伝えており、呼称は伝来時期やそれを人々がどんな目で見えていたかという受容過程の情報を含んでいる。この民具に内包されたいわば遺伝子情報は、文献史料のように意図して記録されたのではなく、また伝承のように代々の語り手の解釈を加えながら伝えられてきたものでもなく、たまたま残ってしまった痕跡である。それだけに主観の色眼鏡はかかっておらず、過去を知る手掛かりとしては客観性のある資料といえよう。しかも文献史料は時代が遡るほど数が少なく中央の上層階級の政治・外交の事件性のあるものに限られるのに対して、民具は全国どこにでもあり、しかも地域ごとに驚くほどの個性をもっていて、地域ごとの個性ある過去の社会のあり方や人々の生きざまを復原する手掛かりとして、非文字資料の最たるものといえよう。

2 渋沢敬三のめざした民具研究

「民具」という言葉の創始者で民具研究の先鞭をつけた渋沢敬三とその弟子たちによる足半草履あしなかの研究には、民具の全国的な比較調査から文献史料には記録されなかった庶民の歴史を復原しようという意気込みが溢れている。ただその後の民具研究にはこの観点は十分に活かしきれていない。このたび渋沢の創立した日本常民文化研究所を擁する神奈川大学の COE プログラムに「非文字資料の体系化」が掲げられたことの意義は大きい。常民文化研究所の一員としてこのプロジェクトに参加した私としては、渋沢たちが心に描いた民具の全国的調査から庶民の歴史を復原しようという意図を継承して、民具という非文字資料の体系化に取り組みたいと考えている。

3 比較対象としての日本自体の研究の重要性

COE プログラム第2班のテーマとして身体技法や感性の日本とヨーロッパやアフリカとの比較が

掲げられているが、その比較の基準となる日本そのものが実に多様なのである。「日本文化の東と西」は長らく取り組まれている研究テーマであり、日本文化論の一角を形成してきた。この日本文化が東と西で異なるというのは、おそらく東日本社会と西日本社会の民族構成の違いに由来するのであろう。民族が異なれば身体技法や感性も異なるはずである。この点を抜きにして「日本」とヨーロッパ・アフリカとを比較しても確実性のある成果は期待できないであろう。21世紀的研究水準で日本と外国を比較するためには、他方で日本列島内の民族的多様性を追究する作業が不可欠であり、その民族的多様性は各市町村の博物館・歴史民俗資料館に収集された民具群に形態や呼称の違いとして刻印されている。そこで日本全国の博物館・資料館の収蔵庫の民具の比較調査を実施すれば、古代にさかのぼっての民族の住み分け状況をかなりの精度で地図上に再現することも可能である。私は過去20数年間にわたって各地の民具調査を重ね、民具の作業姿勢＝身体技法の違いや加工技術の違いから担い手の民族性を抽出し、形態や呼称の違いから伝来系譜や伝来時期の違いを抽出するノウハウを蓄積してきた。そこでこの機会に民具の全国比較から日本列島内の過去の多民族状況を検出し地図上に復原する作業を通して、グローバルな視野からの人類文化の比較研究の基礎部分を固めたいと考えている。

II 調査の方法とテーマ

1 全国調査を見通した概況調査と詳細調査

高度経済成長にともなう家の建て替えの波は1970年代前後に一巡しており、いまや民具は農家ではなく市町村の博物館や資料館、あるいは小中学校の空き校舎に収蔵された状態にある。したがって現時点での民具調査はこれらの施設の収蔵庫を見て回るという形態をとることになる。また非文字資料の「体系化」という以上はぜひとも全国調査という形態をとる必要がある。だが全国調査には膨大な時間がかかることが予想され、しかも期間は5年間に限られている。そこで1箇所ごとに詳しい調査をしていたのでは全国をカバーしきれないので、とりあえず資料館を訪ねて収蔵庫を見せてもらい、どんな資料があるかを確認する概況調査を面的に実施し、必要な資料が見つければ後日詳しく調査するといった方法で全国調査に近づける方法をとった。

2 東北地方の木摺臼の作業姿勢の比較

機械化以前の稲の粃摺り作業は土臼（土摺臼）で行われていたが、この中国伝来の土臼は江戸時代に普及したもので、それ以前は木製の摺臼（木摺臼）が使われていた。木摺臼は平安時代から使用が確認でき、朝鮮半島にもあることから朝鮮系渡来人によって持ち込まれたものと考えられる。朝鮮半島の木摺臼は直径が35cm前後と細く、立ち姿勢で把手棒で往復回転させるのに対して、関西では直径が大きく高さの低い木摺臼を2人が尻もちをついた状態で向き合って左右の縄を交互に引き合うという縄引き方式が古代から行われており、日本伝来後の改良と考えられる。これが中国人・朝鮮人の作業姿勢は立位なのに対して日本人は座位とする説にぴったり合うのであるが、東北地方では再び立位に変わるのではないかと思わせる図が菅江真澄の「百臼の図」他に載せられていて以前から注目していた。この作業姿勢の違いは使い手の民族系統の違いに由来するかも知れないからであり、もし

そうなら「日本」は一つに括れないことになる。そこで今回の調査は木摺臼の残存度が高いと目される東北地方から始めることにした。

III 東北地方調査の概報

昨年8月から実質スタートした今年度は、今年の1月までに〔表1〕のように7回の調査をおこなった。それにともなって木摺臼以外で注目されたものは〔図1〕に掲げた。

第1回調査では7日間で岩手県北部と南部の18箇所の資料館を駆け回った。予想通り木摺臼の残存度は良好で北部では4本把手、南部では2本把手のものが使われていたことが確認できたが、その高さが1mを超えるものが多いことからしても立ち姿勢と考えられ、胆沢町では資料館に展示された絵馬のパネル写真から江戸時代にクランク付きの木摺臼を腰掛け姿勢で操作することが行われていたらしいことが判明、岩手県立博物館ではそのクランク付き木摺臼、岩手県立農業科学博物館では縄引き方式が確認できた。また二戸市では絵図には描かれていても現実にはあり得ないと考えていた引手なし馬鍬を確認、馬鍬が全国的に広まった5～6世紀代にこの地が大和の支配圏外にあったことを語る証拠として大発見であった。また東北型の踏鋤ながら柄と平が直線に近いタイプが遠野市と住田町で見つかった。これは国立民族学博物館に展示されているアイヌの鋤に鉄先を付けたような形態で、その関連の有無の検討が新たな課題として浮上した。また東北地方には柄と鍬平が一木造りの鍬があり、一木造りは縄文系の伝統であろうと以前から注目してきたが、岩手県立農業科学博物館では台と柱の大枠が一木造りの織機が確認できた。近代に関わるものとしては北九州系の抱持立犁のほか胆沢町では北陸系の改良犁があり、この来歴については今後の研究課題である。

第2回調査は5日間で青森県の津軽地方を15箇所回った。青森県は広いのでまずは西半分の津軽地方にしぼることとした。津軽では「四季耕作図屏風」の良品を2点確認できた。1点は板柳町郷土資料館の展示パネルに使われていたもので、江戸時代の現地の様子が正確な筆致で描かれている。もう1点は田舎館村博物館に展示されているもので、落款はないが絵柄からは17世紀前半の大坂画壇の絵師の作品ではないかと思われる。ちょうど稲刈りの終わるころで津軽は稲作地帯との感を深くしたが、農具でも稲作関係が主流を占め、木摺臼は効率を求めてかすべて土摺臼に交代してしまったようである。踏鋤は何点か確認できたが畑作用具なので津軽地方には少ないとのことであった。注目したのは馬鍬で、引手は鉄棒でしかも左右の引手ともは先端は左に曲げられているという奇妙なタイプが津軽地方の定型となっていたようである。

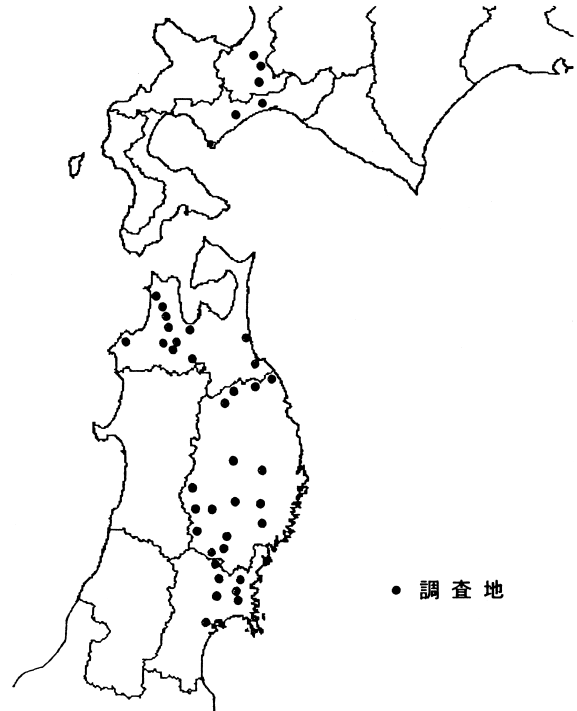
第3回調査は3日間で北海道南部を回った。北海道開拓記念館の「北海道の基層文化をさぐる」展が本調査との関係で見逃せなかったのと、北上山地南部の直線的踏鋤とアイヌの鋤との関連をさぐるためである。開拓記念館の収蔵庫の農具は開拓の際に各地から持ち込まれた農具の系譜を引いていて多様であり、各県の民具と北海道の民具との比較研究が必要なことをあらためて感じた。アイヌの鋤シッタプは苫小牧市博物館にあったが萱野茂氏による複製のようで、国立民族学博物館のも同様の複製品であることから二風谷の資料館を見る必要を感じた。

第4回調査は仙台での日本民具学会大会に合わせて宮城県北部を3日間で回った。金成町や迫町では後枠の傾斜した荷鞍があった。このタイプは南九州にあり、律令国家による唐鞍の導入で乗馬鞍が

表 1 2003年度の東北地方調査

■第1回調査 岩手県 2003.8.16~8.22

	調査日	調査先
1	8月16日	八戸市博物館
2	8月17日	種市町立歴史民俗資料館
3		軽米町歴史民俗資料館
4		二戸市歴史民俗資料館
5		浄法寺町歴史民俗資料館
6	8月18日	北上市立博物館
7	8月19日	岩手県立農業科学博物館(北上市)
8		牛の博物館(胆沢町)
9	8月20日	川井村北上山地民俗資料館
10		遠野市立博物館
11		東和町ふるさと歴史資料館
12	8月21日	碧祥寺博物館(沢内村)
13		湯田町歴史民俗資料館
14		住田町民俗資料館
15	8月22日	道の駅厳美溪(一関市)
16		平泉郷土館
17		胆沢町文化創造センター郷土資料館
18		岩手県立博物館(盛岡市)



■第2回調査 青森県 2003.10.9~13

	調査日	調査先
1	10月9日	青森県立郷土館
2	10月10日	中里町立博物館
3		市浦村歴史民俗資料館
4		板柳町立郷土資料館
5		板柳町教育委員会
6	10月11日	深浦町歴史民俗資料館
7		円覚寺(深浦町)
8		金木町歴史民俗資料館
9		旧平山家住宅(五所川原市)
10		五所川原市歴史民俗資料館
11	10月12日	弘前城史料館
12		平賀町郷土資料館
13		田舎館村埋文センター
		田舎館村博物館
14		青森市歴史民俗展示館(稽古館)
15		三内丸山遺跡(青森市)
16	10月13日	青森県立郷土館

■第3回調査 北海道 2003.10.23~25

	調査日	調査先
1	10月23日	北海道開拓記念館(札幌市)
2		北海道開拓の村(札幌市)
3	10月24日	アイヌ民族博物館(白老町)
4		仙台藩白老元陣屋資料館
5		苫小牧市博物館
6		富士田金輔(札幌市)と面談
7	10月25日	北海道大学北方民族博物館(札幌市)
8		恵庭市郷土資料館
9		恵庭RBパークセンター遺跡展示室

■第4回調査 宮城県 2003.11.19~24

	調査日	調査先
1	11月19日	小牛田農林高校(斎藤報恩農業記念館)
2	11月20日	豊里町教委、竈神収蔵庫・民具収蔵庫
3		桃生町教育委員会
4		桃生町町民総合センター・民俗資料館
5		登米町教育委員会
6		大野家歴史民俗資料館(登米町)
7	11月21日	金成町歴史民俗資料館
8		迫町歴史博物館・旧亘理邸・民具展示館
9	11月24日	仙台市歴史民俗資料館

■第5回調査 岩手県 2003.12.18~20

	調査日	調査先
1	12月18日	平泉郷土館
2		千葉信胤氏宅倉庫(一関市)
3	12月19日	岩手県立農業科学博物館(北上市)
4		胆沢町文化創造センター郷土資料館
5	12月20日	遠野市立博物館

■第6回調査 民博・奈民博 2003.12.27

	調査日	調査先
1	12月27日	国立民族学博物館(大阪府吹田市)
2		奈良県立民俗博物館(大和郡山市)

■第7回調査 青森県・岩手県 2004.1.22~24

	調査日	調査先
1	1月22日	小川原湖民俗博物館(三沢市)
	~24日	
2	1月24日	岩手県立農業科学博物館(北上市)

後枠傾斜型に統一されて以降に馬と荷鞍が導入されたことを示している。このことは裏をかえせば日本に馬と後枠垂直型の鞍が導入された5世紀代に大和の支配圏外であったことを示す痕跡であり、それが東北地方にもあったことに驚くとともに、先の引手なし馬鍬とあわせて大正・昭和の民具からでも地域の5～6世紀の古代史情報を引き出すことが十分可能なことを再確認した。登米町で右反転プラウがあり、東北地方では洋式プラウが一定程度使われていたことと、焼印に「埼玉縣上尾町」と工場名が記されていたことから、関東地方での普及度もチェックする必要を感じた。

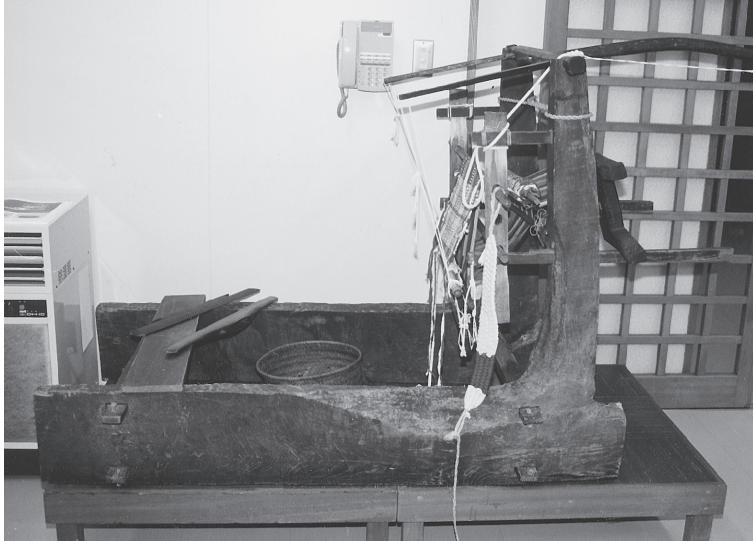
第5回調査は3日間で岩手県の再調査をおこなった。平泉郷土館では木摺臼の計測とともに後枠傾斜型荷鞍を確認した。岩手県立農業科学博物館は前回の写真に木摺臼のクランク様のものが写り込んでいたので再確認のために訪問、菅野繁治氏の協力で棚から下ろしてクランクとコンロッドに相当する駆動桿も揃った完形品であることを確認、計測・撮影した。胆沢町郷土資料館では木摺臼と北陸系の改良犁を計測、後枠傾斜型荷鞍を確認した。

第6回調査は年末で大阪に帰った機会に国立民族学博物館に展示されている木摺臼を計測、直径が34 cm と小さいことや軸受け棧がないことを確認した。奈良県立民俗博物館では大宮守人氏が発見された土臼のベースに転用されていた木摺臼⁽⁴⁾を撮影・計測した。

第7回調査は3日間で、青森県南部地方の資料館として屈指の小川原湖民俗博物館を調査、帰途に岩手県立農業科学博物館の再々調査をおこなった。小川原湖民俗博物館では木摺臼8点、馬鍬11点の計測と57台の荷鞍の概況調査をした。馬鍬では11台の資料からは引手なし馬鍬→木製突起埋め込み方式→鉄棒引手へと改良されていく過程をたどることができた。この資料館では渋沢敬三の示唆により民具はだぶりを拒まず収集するという方針をとっているそうだが、その方針が正しかったことを立証する結果となった。荷鞍でははっきりした後枠傾斜型は確認できず基本的には後枠垂直型であるが、横木が角材ではなく直径3 cm 前後という細い棒で作られているタイプが10台あまり確認できた。これは初めて見るもので分布域の調査を通してその意味を探ることが新たな課題となった。また特記すべきは抱持立犁・洋式プラウに混じって在来無床犁が1台収集されていたことである。青森県に在来犁があったというのは学界の常識を破るもので、南部氏の故郷である山梨県南部町の調査をすれば何らかの手掛かりが得られるのではないかと期待している。

IV 木摺臼の形態分類と分布

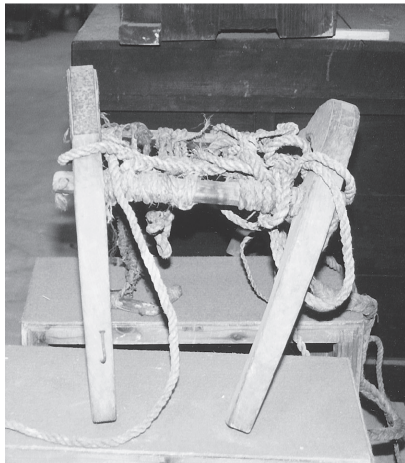
〔表2〕は今回確認できた木摺臼の計測表である。この青森県・岩手県・宮城県北部の調査からは、木摺臼の駆動方法は〔図2〕に掲げた通り4本把手型、2本把手型、縄引き型、棒挿し型（クランク方式）の4種に分類することができ、その分布は〔表2〕から読み取れるように青森県東部から岩手県北部は4本把手型、岩手県中部から宮城県北部に2本把手型、岩手県南部にはクランク棒を横方向に挿し込むクランク方式が使われていたことが確認できる。また関西で主流だった縄引き型は岩手県矢巾町の1例のみである。このうち4本把手型、2本把手型は立ち姿勢、クランク方式は腰掛け姿勢、縄引き型は尻もちをついた形での座位姿勢で操作したものと考えられ、日本列島内の木摺臼の作業姿勢は座位に限らず多様であったことが確認できた。この違いが民族の違いを反映したのかどうかの結論は東北地方全域を調査してからに譲りたいが、少なくとも作業姿勢について「日本では……」



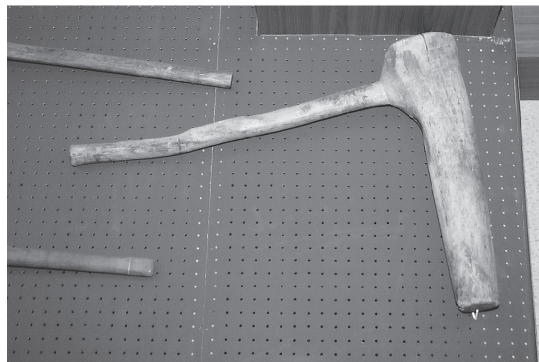
機織り機 (岩手県立農業科学博物館)



鋏 (深浦町歴史民俗資料館)



b 後枠後傾型の荷鞍 (平泉郷土館)

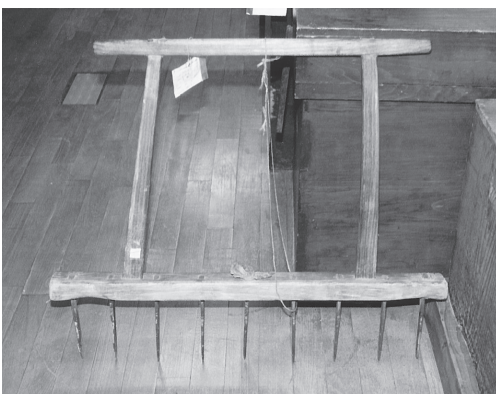


餅つき杵 (小川原湖民俗博物館)

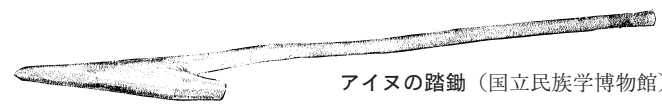


木槌 (小川原湖民俗博物館)

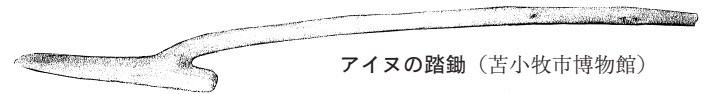
a 一木造りの民具類



c 引手なし馬鋤 (二戸市歴史民俗資料館)



アイヌの踏鋤 (国立民族学博物館)



アイヌの踏鋤 (苫小牧市博物館)



北上山地の踏鋤 (遠野市立博物館)



北上山地の踏鋤 (住田町民俗資料館)

d 直線型の踏鋤

図1 東北地方の特色ある民具類

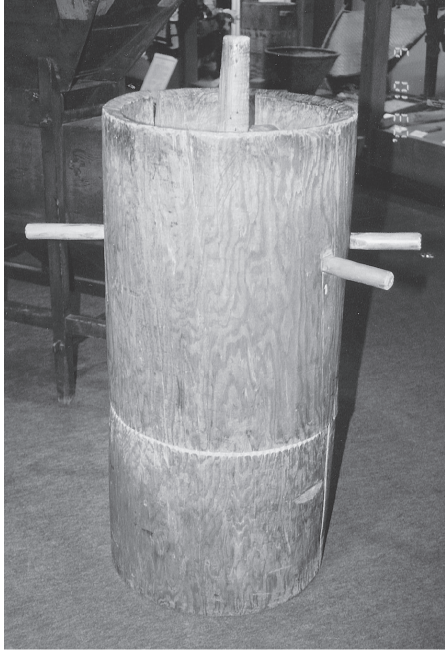
という日本列島を一括りにした議論では済まないことは明らかになった。来年度以降は秋田・山形・福島県および青森県下北地方，岩手県中部，宮城県南部にも調査範囲を広げて東北地方を概観するとともに，木摺臼の残存状態が良いと目される中部地方にも手を伸ばして，より確実な結論を得られるよう努力したいと考えている。

今年度半年間で回ることができたのは東北地方のごく一部にすぎない。先行研究の検討も含めた本格的な考察は調査が進むであろう次年度以降にゆずり，今回は調査の概況の報告にとどめたい。

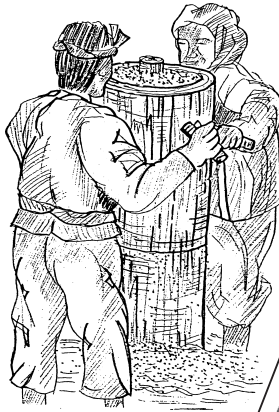
注

- (1) 三輪茂雄『臼』（ものと人間の文化史 25 法政大学出版局 1978 年） p. 109
- (2) 河野通明「平安時代の榎摺臼」（大阪大学文学部日本史研究室創立 50 周年記念論文集『古代中世の社会と国家』清文堂出版 1998 年） p. 325
- (3) 菅江真澄「百臼の図」「凡国異記」（内田武志，宮本常一編『菅江真澄全集』第 9 巻） p. 92, 286, 288
- (4) 大宮守人「二つの木臼～民俗博物館収蔵品から」（『奈良県立民俗博物館研究紀要』第 2 号 1978 年） p. 36, 大宮「県内土臼改造痕の比較研究」（同上紀要第 6 号 1982 年 p. 13），大宮「新たな収集資料に見る木臼の痕跡」（同上紀要第 12 号 1990 年） p. 15

（事業推進担当者）



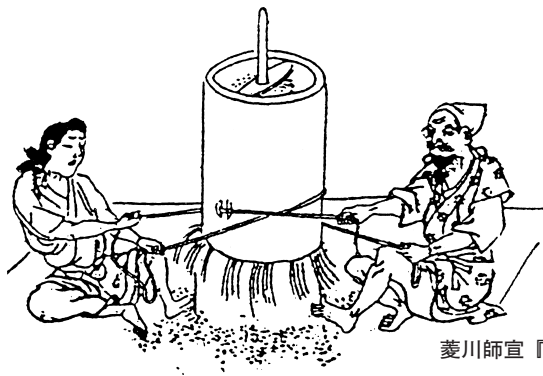
a 4本把手型 (青森県立郷土館)



4本把手型の操作法
(岩手県立
農業科学博物館)



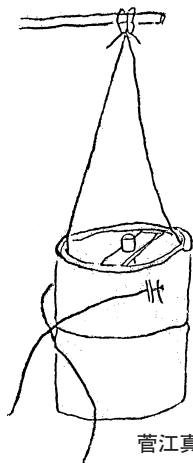
b 2本把手型 (住田町立歴史民俗資料館)



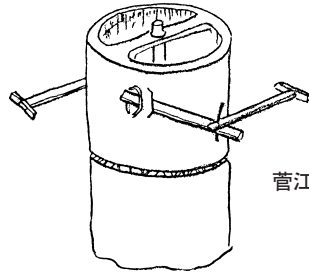
菱川師宣『大和侍農絵づくし』
(模写)



c 縄引き型 (岩手県立農業科学博物館)



菅江真澄『凡国異器』
(模写)



菅江真澄『百臼之図』
(模写)



d 棒押し型 (クランク式)
(岩手県立農業科学博物館)

図2 東北地方の木摺臼の4タイプ

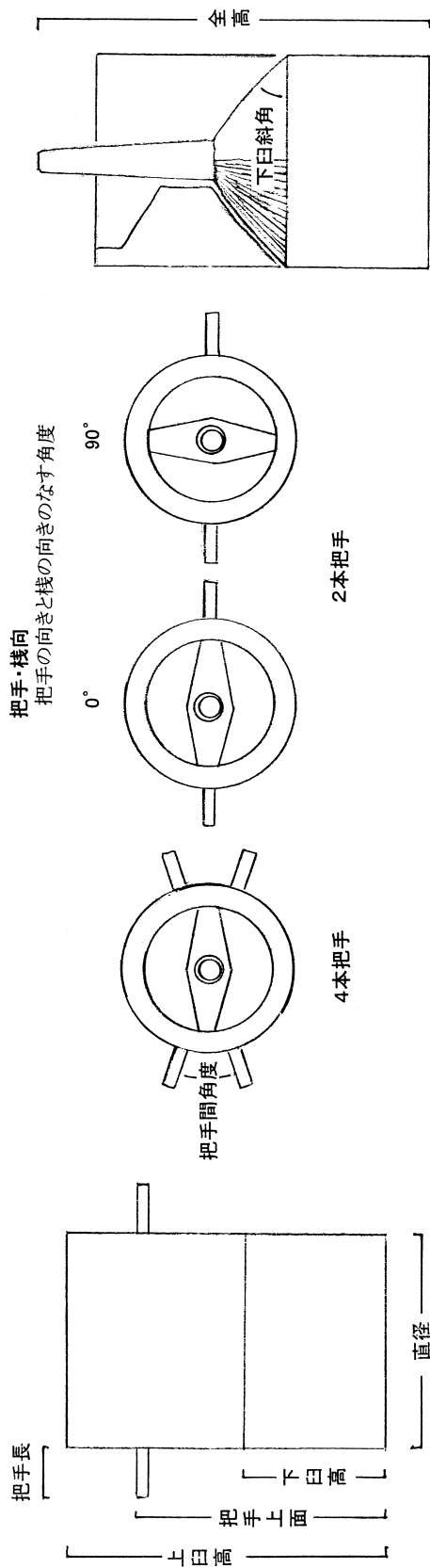


表 2 青森・岩手・宮城の木摺臼

所蔵館名	調査番号	台帳番号	収集地	名札記載の名称	材	直径	下臼高	把手上面	上臼高	把手様式			把手間角度	把手長	把手・棧向	下臼斜角	全高	備考
										4把	2把	縄引						
青森県立郷土館 1			南郷村	キズルス	松	54.0	44.5	87.0	113.0	○			26°	18.0	○		118.5	『青森県の農具』
青森県立郷土館 2			三戸町	スルス	松	52.0			140.8	○						(上部/下部)		
小川原湖民俗博物館 1	No.7				針	60.8	56.7	103.2	136.3	○			40°		○	31°/43°	149.6	
小川原湖民俗博物館 2					松	61.8	60.0			○						46°/45°	160.6	下臼のみ
小川原湖民俗博物館 3					松	64.2				○			42°		○			上臼のみ
小川原湖民俗博物館 4	No.2				松	55.0	46.0	87.0	107.0	○			42°	13.8	○		121.5	2段把手
小川原湖民俗博物館 5								74.5										
小川原湖民俗博物館 6					針	59.0	54.0	94.8	136.5	○			38°		○	50°/43°		
小川原湖民俗博物館 7	No.3				針	55.0	64.0	121.0	161.0	○			38°		○	45°	167.1	
小川原湖民俗博物館 8	No.1				松	52.6	36.0	66.6	91.2	○			34°	12.6	○		106.6	
青森市歴史民俗展示館・稽古館					針	51.2	70.2	131.3	171.0	○				18.8	○		171.0	
八戸市博物館				キズルス	松	59.0	34.8	60.5	88.0		○						100.0	上下2段把手
軽米町歴史民俗資料館 1				木摺り臼	松	47.0	64.0	121.0	147.0	○								
軽米町歴史民俗資料館 2					松	44.0	37.0	56.0	87.0	○					○			
軽米町歴史民俗資料館 3					針					○								
岩手県立農業科学博物館	171-3		軽米町	キズルス	松	55.0	59.8	114.8	144.8	○			38°	18.5	○	42°	150.8	
二戸市歴史民俗資料館 1					松	47.0	44.0	79.0	107.5	○								
二戸市歴史民俗資料館 2					松	47.0	29.0	42.0	75.0	○								
二戸市歴史民俗資料館 3					松	56.0	54.0	94.0	135.0	○						40°	142.0	

